

5時からの招き

奨励	横野 朝彦〔よこの・ともひこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団番町教会牧師 日本クリスチャン・アカデミー関東活動センター所長

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。

(マタイによる福音書 20章1―9節)

招かれてここにいる

同志社スピリット・ウィークにあたり、皆さんと共にこの時を過ごすことができることを嬉しく思います。話をするようにと依頼を受けたものの、わたし自身は同志社スピリットとは何かなど学んだこともありません。同志社スピリット・ウィークの講演記録を見せていただくと、皆さん学術的に論じておられ、そこから教えられ、なるほどと思わされるのでありますが、わたしが自分の言葉で同志社スピリットについて語ろうとするのは難しいことです。わたし自身はそれを、言葉として学んで身につけたのではなく、この学校に身を置くことによって、自然とその空気を吸い込んだのだと思います。ですから、その当たり前としてきた空気の成分が何かなど話すのは難しいことです。

同志社スピリットとは何だろうか、そのことを考えていて思い至ったことがあります。それはひと言で言って、わたしが今ここにいることです。わたしはそもそもこのような場に呼ばれるような人間ではありません。語るにはもっとふさわしい方がたくさんおられるだろうと思います。にもかかわらず、今わたしがここにおいて、話をする機会が与えられている。そのことは、決して大げさではなく、わたしにとって同志社スピリットそのものです。

今日の話は、かなり個人的なことを交えたものとなりますがご許しください。自己紹介をします。現在、東京の番町教会という教会で牧師をしています。わたしにとって牧師として働く三つ目の教会でして、最初は大阪の高槻日吉台教会、二つ目は岡山教会です。教会のことについては、あとで少し話します。

わたしが同志社大学の学生であったのは、1970年前後です。古いことで、今の学生さんたちにしてみれば歴史の年表上の出来事かもしれませんが、いわゆる学園紛争で授業がほとんどストップしていました。どうやって単位をもらい、どうやって卒業したのかよく分からないほどです。

社会が大きく揺れ動いていた時代で、信仰的にも思想的にも、あの時代は多くの人が揺れ動いていました。わたしも卒業後は教会で働きの場を得たいと思いましたが、なかなか行き先がありません。わたしは実際のうえでも、そして内面的にも大変不安定な状態にありました。そんなあるとき、わたしは一つの体験をしました。神戸の、ある教会の前を通りかかりました。そうしますと、そこではいろいろな教会の牧師や信徒が集まって、ハンストをしていました。靖国神社を国家が管理しようという法案が提出されていて、これに反対するハンガーストライキです。そのなかにはわたしの知った顔も何人かいました。わたしはそのころ、社会的な運動にいくぶん挫折感のようなものをもっていましたから、知らぬ顔をして側を通り過ぎようとしてしました。ところが、一人の牧師がわたしを呼び止め、わたしの腕を掴んで無理矢理ハンストの人たちのなかに座らせたのでした。

ハンストだというのに、わたしは昼の食事を済ませた後でした。しかも用事があってそんなに座ってられない。結局、用事がありますから、と5分も経たぬうちに立ち上がって帰ろうとしました。すると、先ほどわたしの腕を掴んだ牧師が、参加者の名簿に名前を書いていけと言うのです。自分はほんのわずかの間そこにいただけで、それにお腹が空いていない状態でハンストなんて言うはずがありませんから、名前を書くのを断りました。ところが、その牧師がわたしに向かって「5時から働いても1デナリだから名前を書け」と言うのです。わたしはこれを聞いたときに、何かに打たれたような気がしました。

それから間もないころ、神学部教授の一人がわたしのところまで訪ねてきてくださいまして、大阪・高槻の教会を手伝ってくれないかとのことでした。そしてそれ以来、わたしは大阪の教会で牧師としての働きを始めました。さらにそれからしばらくして、別の教授から電話があり、同志社香里、また同志社女子高校で授業をもってほしいという声がかかりました。これはまさに、わたしにとって5時からの招きでした。

天の国の譬（たとえ）

「5時から働いても1デナリ」、これは先ほど読んでいただいた聖書に書かれていた、イエスの譬話です。今日読んだ聖書（新共同訳）では1デナリオンとなっています。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行きます。そして町にいる人たちに声をかけ、一日につき1デナリオンの約束で、ぶどう園に労働者として送ります。

今日でも日雇い労働者の町では、朝早く4時、5時から手配師たちが労働者をワゴン車などに乗せて工事現場に連れていきます。最近はこちらに加えて、インターネットなどを用いた日雇いバイトというのも生まれています。手取り早い仕事のように見えて、実態は使い捨てです。また、ブラック企業、ブラックバイトなどと呼ばれる労働形態や、日雇いに近い形の派遣労働があります。そしてそれと同じことが、聖書の時代にもありました。

誰もが雇われるわけではありません。雇われるのは、若い人や元気そうな人で、年輩の人や病気がちの人、体の弱そうな人は誰も雇ってられません。仕事にありつけないことを「あがれる」と言いますが、「あがれ」た人は、何もせずに一日を過ごすことになります。日雇い仕事ですから、今日食べるお金、今日泊まるためのお金にも事欠き、ますます体を弱め、悪循環に陥ることになります。若くて健康な者、役に立つ人間は用いられても、そうでない者は切り捨てられる、この社会の縮図です。

ところが、イエスが語られた譬話によると、不思議なことに、朝早くにだけではなく、9時にもう一度人びとが雇われます。9時に町の広場に行くと、まだ何もしないで立っている人びとがいる。そこで、彼らも労働者として雇われたのでした。ここまではありうる話です。きっと人手がもっと必要だったのだろう、だから追加で労働者を募集したのだろうと考えることができます。ところが、話はそれで終わりません。12時に、そればかりか3時にも同じように人を雇うのです。そしてとんでもないことに、もう日没も近い夕方5時になって、人が雇われたのでした。聖書を読みます。「五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った」（6―7節）。

ここまでくると、話がまともではないことが分かります。全くこの世の現実とは違います。誰からも雇われなかった人たちが招かれる、ということが言われているのです。彼らはなぜ何もしないで立っていたのでしょうか。働く気がなかったのだと考えることも可能です。働く気がない人にも働く気持ちを起こさせた、そのように読むこともできなくはありません。でも、ここで言われているのはやはり、体が弱いのか、病気がちなのか、年をとっていつて仕事に適さないのか、いずれにせよ、この社会の価値判断・価値基準からは役に立たない者で見えなかった人びとが招かれたということだと思います。

そしてそれはまさに、1節にあるように、「天の国は次のようにたとえられる」という、天の国、神さまの御心の実現する所では、人はこのように扱われるのだという話なのです。つまりこれは、決して人手が足らなかったから人を雇い足したという話なのではないということです。誰からも呼びかけられなかった人に神は呼びかけを与えられる、それが神の国だという話なのです。

遅れてきた存在

わたしは自分の若き日の歩みのなかで、今日の聖書の譬話を自分の出来事として体験をしました。そして自己紹介をしたように、現在番町教会にいます。番町教会は今年で創立128年、最初の牧師は小崎弘道といいます。小崎は番町教会の創立に先立つ6年前に、現在の臺南坂教会を設立しています。東京基督教青年会、YMCAの創設者の一人でもあり、また『六合（りくごう）雑誌』などキリスト教ジャーナリズムでも活躍しました。番町教会の初代牧師となり4年後、新島襄の死去によって小崎は番町教会を辞め、同志社の社長となっています。歴史に残る人であり、わたしなどは並べたり、比べたりすることの到底できない大人物です。

ところがあるとき、この人の若き日のことを知って、とても興味を覚えました。小崎は熊本バンドの一人です。熊本洋学校に学ぶ学生たちが教師ジェーンズの影響を受けてキリストを信じるようになりますが、小崎は儒教的精神を大事にし、頑としてキリスト教信仰に入ろうとはしません。小崎は一人外れた状態になります。しかしその後、ジェーンズが祈る姿に心打たれて彼もついに信仰をもつに至ります。ある本に、小崎のことを、遅れてきた存在と紹介されていました。

彼が遅れたのはそのときだけではなく、熊本洋学校の学生たちの多くが生まれたばかりの同志社で学んだのでありますが、いざ卒業というとき、小崎だけ赴任先が決まりません。『小崎弘道全集』に、岩村清四郎が小崎夫妻の金婚にあたって書いた文章が載せられています。そこに書かれていました。「明治十二年六月、熊本から来た青年も同志社の四年の業を卒へて、愈々社会に出ることになった。海老名は上州安中へ、横井は今治へ、金森は岡山へ、山崎、森田、市原は同志社英学校に、宮川と加藤は同女学校に、吉田は神戸女学院へ、浮田は天満教会へ、下村は熊本で英語を教へ、岡田は上京して津田仙の学農社にと、それぞれ任地は定ったが、定らないのは小崎一人であった」（小崎弘道『小崎弘道全集第4巻』日本図書センター 2000年）。

小崎の自伝は、子息・小崎道雄による英訳も出ていますが、それを読むと、主語が「わたし」となっており、それを直訳すると「わたしは行き場もないままの状態だった」と、そのときの心情が伝わってきます。わたしはこれを読んだときに、これまで自分から遠い存在だった小崎にととても近い思いをもちました。小崎がすぐに赴任先が決まらなかったのは、どこまで本当が分かりませんが、彼が訥弁（とつべん）だった、話がつかえて下手だったからという説があります。言いましたように、もちろんわたしなどと比べることのできない優れ

た人ですが、彼もまた5時から働いたのだと、わたしは親近感さえ抱きました。

そしてこのように考えてみると、同志社につながる人たちにはどこか面白いところがあります。面白いというか、型にはまらない人が多いと思います。それはたとえとして必ずしも適切ではないかもしれませんが、聖書に出てくるような、朝早く夜明けとともに生真面目に働いた人たちを社会の型にはまる人とするならば、同志社にはそれとはちょっと違う人が多いと思うのです。

小崎が辞任した後の番町教会の二代目の牧師は金森通倫（みちとも）です。金森は、わたしの前任地である岡山教会の初代牧師でもあります。岡山教会辞任後は同志社の校長を務め、その後番町教会に赴任をしています。ところがこの金森という人は、番町教会を辞任した後、長くキリスト教そのものから離れています。のちに信仰を取り戻し熱烈な伝道者になったという、なんとも波瀾万丈な人です。

岡山教会の初代牧師は金森通倫ですが、金森辞任後の第二代牧師は安部磯雄です。この人は日本の最初期の社会主義者であり、早稲田の教授となり、早稲田の野球場は安部球場と呼ばれるような、日本の野球の父とまで言われる人なのです。彼は岡山教会在任中にアメリカに留学し、そこでキリスト教信仰についてかなり自由な理解をするようになりました。石井十次という日本の社会福祉運動の先駆者がいます。石井の日誌を読むと、安部牧師の信仰理解を批判し、安部牧師を辞めさせるためにみんなで祈ったという話まで出てきます。

早退した人をも

同志社スピリット・ウィークにあたり、本日は午後に良心館を会場に『徳富蘇峰と新島襄—蘇峰再評価の動きの中で—』と題する講演があります。蘇峰が卒業を前にして退学をしたことはよく知られている出来事です。中野好夫さんの『蘆花徳富健次郎』は、蘇峰の弟・蘆花を描いた小説ですが、ここに蘇峰の退学のことも書かれています。「信仰も冷え、おまけに新聞記者として立つ志がすでに止み難くなった上は、もはや同志社にあまり未練はなかった」（『中野好夫集 第9巻』筑摩書房1984年）。

けれども、このように退学をしていった蘇峰が、その後も新島と深いつながりを持ち、新島臨終の場にも立ち会い、新島生誕の地の石碑は蘇峰の書によるものであり、新島の墓標が蘇峰の依頼により勝海舟が揮毫（きごう）したものであることは、よく知られています。このことを思うときに、今日は聖書の箇所から、5時から働いた人にも1デナリオンが与えられたという話を読み、小崎弘道が遅れてきた存在であったと言いましたけれど、蘇峰の場合で言うならば、他の人が6時ぐらいいまで働いているのに、彼は4時から5時で仕事を止めて早退をしてしまった。にもかかわらず、新島は彼に1デナリオンを与えたのです。

時代をもっと近くに引き寄せます。ハリス理化学館の隣、同志社礼拝堂との間に詩人・尹東柱（ユンドンジュ）の詩碑があります。1917年に生まれ、1945年2月、27歳の若さで亡くなりました。同志社在学中の1943年に、下鴨警察署によって逮捕され、福岡刑務所で獄死しました。獄中の拷問が事実上の死因だと思われます。日本が植民地支配をし、日本語が強制され、創氏改名つまり日本風の名前が強要されるなか、彼は朝鮮語で詩を詠みました。それが独立運動の嫌疑と治安維持法違反となったのです。

ハリス理化学館隣の詩碑は、彼が亡くなって50年目、1995年に建立されました。卒業生による「同志社校友会コリアクラブ」の働きによるところが大ですが、同志社の中でも一等地と言える場所に、逮捕投獄とは言え、卒業していない人の詩碑を建てることを認めたというのは、わたしはこれを、同志社の同志社らしき出来事だと思っています。尹東柱が同志社に在籍したのは10カ月足らずです。徳富蘇峰が5時ぐらいいに仕事を止めてしまったとすれば、尹東柱の場合は朝の9時にはそこからいなくなりました。けれども、詩碑を建て顕彰をしている。1デナリオン以上のものがあります。

わたしは神学部卒業ですが、神学部は現在、入学許可条件のなかにキリスト者であるか否かは問うていません。わたしが入学したころは牧師の推薦状が必要でした。また、世間からは神学部とは牧師になるところと考えられていました。しかし、同志社大学神学部は牧師だけではなく、もっと幅広く社会で活動する人物を生み出しています。古くは、社会福祉事業の先駆者である留岡幸助や、このクラーク記念館の2階に肖像レリーフのある山室軍平、この人は日本における救世軍の創立者ですが、社会福祉事業家として大きな働きをした人です。

このように古い人の名前を挙げなくてもよいと思います。最近の人で一人だけ名前を挙げるならば、大阪の日雇い労働者の町・釜ヶ崎に金井愛明（かないあいめい）という牧師がいました。今から7年前に亡くなっています。西成教会の牧師でしたが、それよりも「いい食堂」という食堂のおやじでした。日雇い労働者に玄米を中心とした栄養のある食事を提供していました。わたしは若い日に金井さんから多くを教えられました。何を教えられたかと言っても、言葉ではなく、まさに生きざまでした。この食堂のおっちゃんに、同志社は名誉神学博士の学位を贈りました。本人はかなり悩みながら、この名誉ある1デナリオンを受け取りました。

あれこれ名前をたくさん挙げすぎたようです。わたしが言いたかったことは、社会的に良い働きをした人であっても、その一人ひとりには時に5時から雇われ、時に早退をし、また周りから期待される型にはまった生き方から外れていると思えてなりません。彼らがどこまで意識していたかどうかは別にして、それはやはり、同志社スピリットに生きた人びとと言うことができます。

新島襄は遺言のなかで、「社員たるもの生徒を鄭重に取扱ふ可き事」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集4』同朋舎出版 1989年）と言いました。また新島が言った「人一人八大切ナリ」（『新島襄全集1』1983年）とは有名な言葉です。このように、自分は大切に扱われてきた。5時になっても行き場もなくうろろしていた自分が招かれ、そして今、わたしはここに立っている。このこと、の感謝を述べて、わたしの話を終えることにします。

2014年6月11日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録